

# 鄧石如における隸書筆法形成の理解への試論 (II)

An essay to understand how Deng Shiru's brushstroke of clerical script was formed (II)

遠藤 昌弘

Masahiro Endo

## 目次

### 前言 (I)

1. 鄧石如の有紀年隸書作品目録 (I)
  2. 鄧石如隸書作品の形態における特徴 (I)
  3. 鄧石如以前とその後の隸書の概観 (I)  
— 以上の文章・図版 (1~35)・参考図版 (1~6) は、第二四号に掲載 —  
\*\*\*\*\*
  4. 鄧石如の隸書への諸家の言及 (II)
  5. 鄧石如の人物交流からみた書法の影響 (II)
  6. 鄧石如の有紀年隸書作品からみた書風の変遷 (II)
- 結語 (II)

### 4. 鄧石如隸書作品についての諸家の言及

鄧石如隸書作品についての諸家の言及を以下に挙げる。鄧石如の書作品に関する言及は、金榜 (生卒不詳)①・曹文植 (?—1798)②・劉墉 (1719—1804)③・陸錫熊 (1734—1792)④・左甫 (1751—1833)⑤・李兆洛 (1769—1841)⑥・錢坫 (1774—1806)⑦・吳育 (生卒不詳)⑧にみられる。しかしこれらの諸家の言辭は、鄧石如の書作品を稱賛するものであるが、その具体性は乏しい。また鄧石如の活躍と同時代か、やや後輩であるだけに、当然のことながら鄧石如以後の隸書の継承や隆盛をみなすことから、具体性のない賛辭に終始していることはやむを得ない。鄧石如の書作品について詳細に紹介し、その筆法まで言及したの

は包世臣が最初の人物で、ついで康有爲がいる。のち戦争や中国国内の混乱を経て、現代の穆孝天氏、王征氏、わが国では西川寧氏の説を取り上げる。

この他に、鄧石如について述べた人物に方朔・屠寄・楊守敬がいる。また、わが国における鄧石如の隸書書法については、西川氏の他に、田中有氏・伏見冲敬氏・新井光風氏・大野修作氏・杉村邦彦氏・高畑常信氏などに論考がある。また作品解説などには、おおくの識者が言及している。このほか『藝舟雙楫』『廣藝舟雙楫』『書概』及び中国の論考の訳本を多数手がけた高畑常信氏の業績は見逃すことはできない。

以上の詳細については、筆者（遠藤）が大東文化大学書道研究所『大東書道研究』第一四号（2006）に載せた「鄧石如研究資料文献目録」を参照願いたい。

①②③については、小稿「鄧石如における篆書筆法形成の理解への試論」Ⅱ（大東文化大学書道研究所『大東書道研究』第三号所収）第四章に注記したので参照願いたい。

4・1、包世臣（1775—1855）の評

鄧石如との最初の出会いは、嘉慶七年壬戌（1802）の秋、鄧石如六十歳、包世臣二十八歳にあたる。このとき包世臣は、十余日

を鄧石如と共に過ごし書を学んでいる。つぎは翌年の嘉慶八年癸亥（1803）夏、揚州（江蘇省）で包世臣と面会する。「完白山人傳」にある「復於揚州相值。山人作太山（泰山）之遊」の記述である。

この時の様子は詳しく書かれていないが、この面会が包世臣にとつては最後となった。嘉慶十年乙丑（1805）十月四日、鄧石如は自宅（安徽省懷寧縣皖公山麓白麟坂の鐵研山房）にて六十三歳で病没する。包世臣が「完白山人傳」を書いたのは、その翌年であった。包世臣「完白山人傳」は、丙寅つまり嘉慶十一年（1806）包世臣三十二歳のときに書かれた文章である。

『藝舟雙楫』は、包世臣三十二歳から六十歳までの各論を合わせた著作集で、その中でも「完白山人傳」は包世臣にとつて最初に起稿した文章であり何より思い入れの深い執筆といえる。

さて、包世臣「完白山人傳」によれば、乾隆四十五年庚子（1780）鄧石如は三十八歳の夏に、

……南金（江蘇省）に行き、梅鏐の家に客居すること約半年。これ以後、八年にわたり梅家にて書を学び、とくに篆書・隸書を習得する。『石鼓文』『嶧山碑』『泰山刻石』『開母石闕（開母廟石闕銘）』『燉煌太守裴岑紀功碑』『禪國山碑』『天發神讖碑』『城隍廟碑』『三墳記』について各百本を臨摸し、さらに『說文解字』二十本を手寫して半年になる。また一方で三代鐘鼎・秦漢瓦當碑額を学び、五年

のち篆書を習得する……と述べ、さらに加えて、

……乃學漢分、臨『史晨前後碑』『華山碑』『白石神君』『張遷』『潘校官』『孔羨』『受禪』『大饗』各五十本。三年分書成。

漢分を学ぶ。『史晨前後碑』『華山碑（西嶽華山廟碑）』『白石神君碑』『張遷碑』『潘校官碑（校官碑・潘乾校官碑）』『孔羨碑』『受禪碑』『大饗碑』について各五十本を臨摸し、三年のち分書を習得する……と述べて、具体的に学書の内容を紹介し、篆書を習得してから隷書の習得を加えたことを指摘する。

鄧石如の隷書について、以下に学書の内容を分析してみよう。篆書を習得したのち、隷書を学んだとする。『史晨前後碑』（169）『華山碑（西嶽華山廟碑）』（165）『白石神君碑』（183）『張遷碑』（186）『潘校官碑（校官碑・潘乾校官碑）』（181）以上は後漢の碑刻である。また『孔羨碑』（220）『受禪碑（受禪表）』（220）『大饗碑』（220）以上は三国魏の碑刻である。それぞれ五十本を臨摸し、三年で隷書を習得したとしている。

道光四年（1824）包世臣五十歳の著述に「國朝書品」（『藝舟雙楫』論書一所収）がある。この中で、鄧石如の書を分類して篆書・隷書・分書・真書（楷書）・行書・草書を挙げて、その書品を格付けしている。神品を最上とし、妙品・能品・逸品・佳品の順となり、妙品から佳品までは、さらに上・下に分類して、九等の分類

をしている。神品には鄧石如の隷書・篆書を、妙品上には鄧石如の分書・真書を、能品上に鄧石如の草書を、逸品上に鄧石如の行書を挙げている。そして神品の順番は隷書を最初に挙げ、つぎに篆書を挙げている。包世臣の九ランクの判定にかかった人物と書体は九十七で、書体を複数挙げられた人物もいるので、九十一人が対象となった。包世臣は、その最高評価である神品としたのは、鄧石如の隷書・篆書のみである。その書体の順番についても留意したと考えて良いだろう。当然、先に挙げた隷書が神品の上位であり、後の篆書は下位ということは含まれているという考え方が自然であろう。包世臣が最も評価した隷書とは何をさすものか、を知る必要があるのである。

追考―包世臣における隷書と分書について―ここで注意したいのは、神品の隷書と妙品上の分書の区別である。包世臣は、「國朝書品」においては、あきらかに隷書と分書の異なった書体として認め区別をしている。これについて西川寧氏は「包慎伯の書学3」（『書苑』第二巻第六号所収 1938）において、隷書とは八分ではなく、波磔のない、俗にいう古隷であろうとするが、西川氏は後段において追述して、神品にあげた鄧の隷書とは、何か特殊な一、二の作例を取り上げたのであろうと思う。それに、前に言っ

た篆書を論じた条にも、鄧の篆はやや隸意を参しているともいうから、包氏の考えた鄧隸の味というものは、篆書に対する同じようなものであったかもしれぬ」としている。

すでに西川氏が文中で指摘する通り、包世臣は篆書には、横縦闔關之妙、分書には、適麗淳質、真書には、簡肅沈深、草書は、筆致蘊藉などの評語があるが、隸書・行書には、言及がない。しかし、包世臣は「論書十二絶句」（包世臣四十五歳執筆）『藝舟雙楫』論書一所収）では、懷寧布衣鄧石如頑伯。篆・隸・分・真・狂草。五体兼工」といい、また「自跋草書十二答問」（包世臣三十八歳執筆）『藝舟雙楫』論書二所収）では、懷寧、篆・隸・分。已臻絶詣」と述べているように、明らかに区別して認識されていることが理解できる。

ここで「完白山人傳」において、すでに述べた隸書学習の記述を確認してみると、寒暑不輟、五年篆書成。乃學漢分……とあって、隸とは述べていないことがわかる。包世臣が指摘した隸書碑には、『白石神君碑』や『張遷碑』の古隸に近いと考えられるものもあるが、これらも含めて分（また八分隸・分隸）なのである。また漢分としながら、三国魏の『孔羨碑』『受禪碑』『大饗碑』を含めている点もあり、文言が一致していないことも指摘しておく。この点において、包世臣は文章中の語句の扱いについて整合性を欠

いている。

包世臣は、篆書と隸書の学書の過程を述べたのちに、鄧石如における隸書の筆法に言及し、

……山人篆法以二季爲宗、而縱横闔關之妙、則得之史籀、稍參隸意。殺鋒以取勁折。故字體微方、與秦漢當額文爲尤近。其分書則適麗淳質、變化不可方物。結體極嚴整、而渾融無迹。蓋約『嶧山』『國山』之法而爲之。故山人自謂「吾篆未及陽冰、而分不減梁鶴」余深信其能擇言也。山人移篆分以作今隸、與『瘞鶴銘』『梁侍中石闕』同法。草書雖縱逸不入晉人、而筆致蘊藉、無五季以來俗氣。山人客于梅氏八年、學既成。

用筆は、鄧石如の篆書は李斯と李陽冰を根本としている。その縦横闔關の妙は史籀より習得し、やや隸意を含んだ。用筆は殺鋒して勁折をなした、よって字體はわずかに四角く、秦漢の瓦當碑額の文字によく似ている。その分書は適麗淳質であり、変化して四角いだけではない。文字構造は極めて嚴整であるが、渾融して型にはまっていない。思うに『嶧山刻石』『禪國山碑』の筆法を取り込んで出来たものであろう。だから鄧石如は自分で「わたしの篆書は李陽冰には及ばないが、分書は梁鶴に劣ることは無い」と言っている。わたし（包世臣）も深くその言葉に心服した。鄧石如は篆書分書の筆法をもって今隸（楷書）を揮毫した、よって『瘞鶴銘』『梁侍中石闕』と同じ筆法となった。草書は縱逸にして王羲

之の風ではないが、筆致は蘊藉にして、宋元以来の俗な所は無い。鄧石如は梅家に僑居し学書すること八年にして、学問を成就させた……と述べている。

「殺鋒以取勁折」における殺鋒とは、筆鋒に対する処理を述べているのは理解できるが、具体的に何を述べているのかは判然としない。清朝の中期における鄧石如以前に行われていた、筆鋒を焼いて筆鋒を固定させる「焼鋒」の可能性もあろう、しかし「勁折」を言うことから、ここでは従来の篆書揮毫で行われていた「焼鋒」ではなく、用筆をさして「逆入平出」による藏鋒を意味していると考えられる。包世臣「完白山人傳」は、包世臣三十二歳のときに書かれた文章であるが、この時はまだ「逆入平出」の語が包世臣の中で出ていなかったのかもしれない。逆入平出が出てくるのは、「跋蔡群王臨快雪内景二帖」(「藝舟雙楫」論書二所収)で包世臣四十三歳のときに書かれた文章である。しかしここでの字句は、篆書の筆法の説明ではない。篆書の筆法で「逆入」に近い言葉として出てくるのは「用逆」の語である。「與吳熙載書」(「藝舟雙楫」論書二所収)で包世臣五十九歳のときに書かれた文章である。ここでは「用逆以換筆心。篆・分之秘密」と述べていて、明らかに篆書と分書の筆法の奥義として説かれている。ここでは、先に触れた分書と隸書のうち、隸書については言及していない。

鄧石如の自己の書を分析して言及した言葉は、たいへん少なくその内容は重要である。それだけに包世臣も鄧石如から直接聞いた言葉として「完白山人傳」に載せたものと思われる。「わたし(鄧石如)の篆書は昔の唐の李陽冰には及ばないが、分書は昔の名人である梁鵠には劣らない」とは、鄧石如は李陽冰の篆書を規範として、それを乗り越えて技法を優れたものにしたとは思わないが、隸書は梁鵠よりも優れていると自負するほどに鄧石如自身が分書の完成に意識を持っていたものである。そこで梁鵠はどういう評価をされた名人であったかを知っておく必要がある。衛恒『四体書勢』には、「邯鄲淳は繊細な字をよくし、梁鵠は雄大な字をよくした」とが述べられている。鄧石如は、当然この雄大な字を意識して、自分(鄧石如)は劣らないと自負したものと考えられる。鄧石如自身は、篆書よりも分書に絶対の自信があったことを、強く表現した言辞であり、また包世臣も深くこの点に同意したことから「完白山人傳」に載せたものと考えられる。

この「完白山人傳」を執筆したのは、前述の通り嘉慶十一年(1806)包世臣三十二歳のときの著述である。そして「國朝書品」は道光四年(1824)包世臣五十歳のときの著述で、この間に十八年が経過している。包世臣自身も、鄧石如作品を評価するとき当然に様々な事例を検討したことは至極当然の事であろう。そこで、

鄧石如自身も自認し包世臣自身も評価している分書の内容が、分書を完成させた作品と、さらに分書を発展させて鄧石如だけの独創ともいえる、のちに『鄧隸』と称されるほどの高い芸境の作品とを区別して評価する必要が出てきたと考えることは決して付会とはいえないだろう。そこで、分書よりも、さらに一段高い表現作品を『隸書』として区別したものであろうことを提案したい。

具体的に、包世臣が神品と評価した隸書とは何を指すか。それは分書は昔の名人である梁鶴には劣らない。つまり、雄大な字をよくくした梁鶴よりも優れているという鄧石如の自身の言葉にある通り「条幅作品に見る筆力を充滿させた（大字）隸書」こそが、包世臣が神品と評価した隸書であり、「冊頁にみる流麗典雅な（小字）隸書」は分書として区別して評価していたであろうことを指摘して、諸賢の批正を待ちたい。

この理解であれば、包世臣が『神品』と評価した隸書は西川氏が指摘した「いま見る古隸」や「何か特殊な一、二の作例」といった極めて少数の作例を対象としたものではなく、鄧石如五十代以後の条幅作品（図8・五十歳・図21・五十九歳・図25・六十歳）や対聯（図28・六十二歳・図31・六十二歳）をはじめとし、世に傑作と称賛される八屏（図23・六十歳）四屏（図27・六十一歳）や六屏（図32・六十歳）、また八屏（図33・六十三歳）、さらに最晩年の傑作として誰

しもが認める十屏（図35・六十三歳）が該当すると思われる。また包世臣が妙品上と評価した分書としては、四体書冊のうちの隸書（図13・五十五歳・図15・五十七歳）や隸書冊（図14・五十五歳）、さらに最晩年の隸書碑（図35・六十三歳）が該当すると思われる。

4・2、康有爲（1858—1927）の評

『廣藝舟雙楫』は、光緒十五年（1889）、康有爲三十二歳の著述である。内容は『廣藝舟雙楫』の「叙目」には康有爲自身の言として、國朝多言金石、寡論書者。惟涇縣包氏、鈇之揚之。今則孳之衍之、凡爲二十七篇」とあるように、包世臣『藝舟雙楫』の論書をさらに敷衍したものである。

康有爲は『廣藝舟雙楫』の中で、具体的に篆書と隸書の関係について述べているのは「尊碑第二」があり、本文の前文で帖学がすでに廃れ、碑学にとつて代わったことを前置きして、

……道光之後、碑學中興、蓋事勢推遷不能自己也。乾隆之世、已厭舊學。冬心・板橋、參用隸筆、然失則怪、此欲變而不知變者。汀洲精於八分、以其八分爲真書、師仿『吊比幹文』、瘦勁獨絕。懷寧一老、實丁斯會、既以篆隸之大成、其隸楷專法六朝之碑、古茂渾樸、實與汀洲分隸之治、而啟碑法之門。開山作祖、允推二子。

道光年間以後には碑学が盛行したことが必然であることを説いたのち、

乾隆年間(冬心)・鄭燮(板橋)が隸書を始めたが筆法を得ていないとし、伊秉綬(汀洲)と鄧石如(懷寧一老)が筆法を完成させたことによつて碑字が確立したことを強調している。この中で鄧石如は「其の隸楷は法を六朝の碑に専らにし、古茂にして渾樸なり」として、鄧石如の隸書が六朝の諸碑に専念して確立されたことで、古茂(いにしへのさかん)・渾樸(純粹な素朴)を表現している……と述べている。

また「説分第六」においては鄧石如の隸書の出自と、その用筆の正当性について述べている。

……國初猶守舊法。孫淵如洪稚存程春海並自名家。然皆未能出少溫範圍者也。完白山人出盡收古今之長、而結胎成形。於漢篆爲多、遂能上掩千古、下開百禩。後有作者、莫之與京矣。完白山人之得處、在以隸筆爲篆。或者疑其破壞古法。不知商周用刀簡、故縮法多尖。後用漆書、故頭尾皆圓。漢後用毫、便成方筆。多方矯揉、佐以燒毫。而爲瘦健之少溫書、何若從容自在、以隸筆爲漢篆乎。完白山人未出、天下以秦分爲不可作之書。自非好古之士、鮮或能之。

清朝の初期は、篆書は旧法で書いていた。孫星衍(1753—1818)・洪亮吉(1746—1809)・程思沢(1785—1837)は名人であったが、皆、唐の李陽冰の筆法であった。鄧石如が篆書をかいで、古今の優れたところをすべて取り入れた。字姿は、漢代の篆書によるところが多く、ついには千年の昔よりもすぐれ、その後の百年をみち

びいた。鄧石如より以後の人で、鄧石如を重んじない人はいなかった。

鄧石如の優れている点は、隸書の筆法を篆書にしたことであるとする。

また、鄧石如の篆書は柔毫筆をもちいて、それ以前の「筆鋒を焼いたもの」を使っていないことを指摘している。むかしの殷や周の時代には小刀によつて文字を書いていたので、小篆以前にはとがった部分が多いのである。のちに漆をもちいて書くようになったので、起筆と収筆はまるくなった。漢代以後は筆をもちいたので、文字は角味を帯びるようになった。ほとんどの筆はやわらかく、筆鋒を焼く必要があつた。「筆鋒を焼いた筆」で瘦せ細つた李陽冰の篆書はできたが、「筆鋒を焼いた筆」で思うままに隸書の書き方で漢代の篆書を書くことができようか……と述べている。

康有爲は、鄧石如が創出した篆書の筆法を、李陽冰と比較して違いを指摘している。隸書の書き方で漢代の篆書を書くには、筆鋒を焼くことをせず、しかも柔毫筆でなければ自在に運筆できないことを説いて、鄧石如が柔毫筆をもつて隸書や篆書を揮毫したことを前代にない優れた点として評価している。

また、鄧石如の隸書における学書の対象を具体的に述べているのは「述学第二十三」である。

……少讀『説文』、嘗作篆隸、苦蓋山①及陽冰之無味、問九江先生、稱近人鄧完白作篆第一、因搜求之粵城、苦難得。壬午入京師、

乃大購焉。因並得漢魏六朝唐宋碑版數百本、從容玩索、下筆頗遠於俗、於是翻然知帖學之非矣。惟吾性好窮理、不能為無用之學、最懶作字、取大意而已。及久居京師、多遊廠肆、日購碑版、於是盡見秦漢以來及南北朝諸碑、泛濫唐宋、乃知隸楷變化之由、派別分合之故、世代遷流之異。

わたし（康有爲）は若い頃に『説文解字』を読み、篆書隸書を学んだが『嶧山刻石』や李陽冰の無味な表現に苦しんだことから、師である朱九江先生（1807—1881 名は次琦）に質問すると、最近の人物では鄧石如を第一と推称されたが、広州でその書を得ることはできなかった。光緒八年（1882 壬午）北京に行ったときには、沢山のものを買おうとして、漢魏六朝唐宋の碑拓を数百本も得ることができた。思う存分にこれらを臨書すると、いままで揮毫していた通俗な文字から遠ざかったのでこれまで学習してきた帖学が役に立たないことを悟った。おもうに当時の私（康有爲）は朱子学を好んでいたの、そのほかは無用の学問であった。もつとも怠けていたのは字を書くことで、大雑把な心得があるだけであった。北京の滞在は長期にわたったが、そのあいだ本屋街を訪ねては碑拓を求めて過ごし、秦漢から南北朝期の諸碑をつぶさに鑑賞し、唐宋におよんだ。そして隸書から楷書へ変遷した理由や、南北に書派が分かれまた合わさる理由、また時代によって変遷があることを理解した……と述べている。

①蓋山は誤植であろう、『廣藝舟雙楫』に蓋山という碑名は挙げられていない。文章では李陽冰と共に挙げていたので、秦の篆書で「山」の付く石刻あれば、『嶧山刻石』または『泰山刻石』のいずれかである。「説分第六」において……吾嘗學「琅琊台」「嶧山碑」無所得、又學李陽冰「三墳記」「樓先登記」「城隍廟碑」「庚賁德政碑」「般若台銘」、無所入……と述べていることから、蓋山は嶧山（嶧山刻石）と考えられる。

また、沈曾植（1850—1922 字は子培）や張裕釗（1823—1894 字は廉卿）の書について見解を述べながら自身の学書過程について言及しているが、ここでは本文と概略は省くこととする。

さらに、鄧石如の楷書を習得したことに言及し、……又得鄧頑伯楷法、蒼古質樸、如對商彝漢玉、真「靈廟碑陰②」之嗣音。蓋頑伯生平寫「史晨」「禮器」最多、故筆之中鋒最厚、又臨南北朝碑最夥、故其氣息規模、自然高古。夫藝業惟氣息最難、慎伯僅求之點畫之中、以其畫中滿為有古法、尚未為知其深也。

その書は蒼古質樸（ふるめかしく飾り気がない）であり、殷代の青銅器や漢代の玉器のようである。これこそが「中嶽嵩高羅靈廟碑陰」（靈廟碑陰）の音（かん）固有の優れた風韻）を継承して同様に見事なものである（ここでは書風の継承の意味で述べたものではなく、書の内容の素晴



らしさを『中嶽高羅靈廟碑』を例にして絶賛している。おもうに頑伯(鄧石如)は、生平に『史晨碑』『禮器碑』を臨書することが最も多い、だから筆跡における中鋒は重厚なのである。また(鄧石如は)南北朝期の諸碑を臨書することも大変多かった、だから筆跡のもつ氣息(氣韻)は、自然にして高古であった。そもそも芸術における氣息というものは最も難しいもので、包世臣(慎伯)の書には少しだけ点画に(氣息は)あったが、それをもって古法(本来の書法)とすることはできないもので、まだ(包世臣には)その深奥は理解されていない……と指摘している。

②『靈廟碑陰』は、『廣藝舟雙楫』において、康有爲が絶賛したもので「購碑第三」では「中嶽高羅靈廟碑」(太安二年、寇謙之書、篆額陽文、有陰)——と紹介するものである。記述中の字句としては「中嶽高羅靈廟碑」のほかに「靈廟碑」と略して十二回を数える。また『靈廟碑陰』については、十回を数える。とくに「碑品第十七」では最高の評価を与えた名称の「神品」として『爨龍顏碑』『靈廟碑陰』『石門銘』の三碑を挙げている。さらに「碑評第十八」では「渾金璞玉の如し、寶采は名し難し(黄金宝玉であって、その様子は言葉にできない)——と讚嘆してやまず褒辞を尽くしていることからも康有爲の尊重が理解できる。『中嶽高羅靈廟碑』の「羅」は、諸書を検索してみたが、この呼称を見ない。また碑篆額にも「中嶽

高羅靈廟之碑」とあることから衍字と考えられる。

補記—康有爲は寇謙之の書と明記するが、歐陽脩「集古錄跋尾」の記載によるものであり確証はない。また太安二年(456)の建碑年も、『金石錄』の記述によるもので碑文中に年号は確認することはできない。『碑陰』拓本は極めて少なく、二玄社『書跡名品叢刊』七〇で碑陰全景を見ることができるとある。

ここでは鄧石如の隸書については、生平より『史晨碑』『禮器碑』の二碑を臨書していたことをとくに指摘している。その裏付けとして鄧石如の隸書にみる筆跡が中鋒重厚であることが理由とする。また氣息という概念に着目し、これが鄧石如作品のもつ独自性として指摘し、その理由について鄧石如が南北朝期の諸碑を臨書したこと由来すると指摘している。

すでに本稿第二章の第一節で述べた包世臣『藝舟雙楫』では、多数の隸書碑名を挙げて、鄧石如における隸書の学習過程について説明しているが、康有爲の説では『史晨碑』『禮器碑』の二碑を挙げている点の特徴である。また南北朝期の諸碑も挙げていることから、包世臣の説とは相反しない。ただし、包世臣が直接に鄧石如から教示を得ていること、また年代差はあるが鄧石如と同時代に活躍したことを考えると包世臣説に重きを置かなければならないだろう。いっぽう康有爲説の論拠は鄧石如の隸書作品にみる筆跡の検討と分析

を理由とするもので、康有爲による推断とも言つてよい帰結であつて真相は担保されていない。

4・3、穆孝天氏（1919—1996）の評

穆孝天氏の鄧石如についての著作は、夫人である許佳瓊との編著で鄧以蟄氏の校訂による『鄧石如』安徽教育出版社（1983）・『鄧石如資料匯編』・『鄧石如書法篆刻芸術』安徽人民美術出版社（1984）・許佳瓊との共著『鄧石如研究資料』人民美術出版社（1988）・許佳瓊との共著『鄧石如世界』明文書局（台湾 1990）などがある①。

①穆孝天氏の研究論文については、小稿「鄧石如における篆書筆法形成の理解への試論」（Ⅱ）第四章の第三節に詳述したので参照願いたい。

穆孝天氏は「鄧石如書法評伝」（栄豊齋『中国書法全集六七 鄧石如』所収 1995）において、鄧石如の隸書の特徴として、用筆（運筆の方法）と、結字（文字の構造性）の二面を兼ね備えたことを指摘し、これにより逆筆中鋒（逆筆により中鋒となる）・使転蒼厚（運筆が重厚になる）・縦横馳騁（自在に筆が動く）・無所依傍（独自の表現となる）の四点が表現されることを指摘する。ここでは原文の中国語は長文のため引用を省き、その概略を筆者（遠藤）が邦訳し

紹介する、

……鄧石如の隸書の特徴として、用筆と、結字の二面を兼ね備えたことを指摘し、これにより逆筆中鋒・使転蒼厚・縦横馳騁・無所依傍の四点が表現される。『張遷碑』の凝重（かさねて重々しい）、『禪國山碑』の豊偉（たっぷりとして堂々としている）、『華山廟碑』の恣縦（取り繕うところが無い）、『白石神君碑』の磅礴（広々としている）、そして蒼勁（ちからづよさ）と灑脱（すっきりとしている）は、鄧石如の筆跡でなれば表現できないところである。この理由で人々はいつも「鄧石如の筆跡に対して、諸家の精髓（もつとも優れている部分）を融合させた」と言うのである……と述べている。

穆孝天氏は、とくに『張遷碑』『禪國山碑』『華山廟碑』『白石神君碑』の四碑を挙げているが、結論では包世臣・康有爲と同様に諸碑を学んで書法を完成させたことを述べている。鄧石如の書表現について、用筆と、結字の兼備により逆筆中鋒・使転蒼厚・縦横馳騁・無所依傍が表現されているという分析と指摘は康有爲の説よりもさらに詳しいが、これも作品の印象からの推断による帰結であり真相は担保されていないことは同様である。

また鄧石如の用筆について、新しい見解を述べて、  
……鄧石如は、篆書と草書の筆勢（運筆法）を用いて、隸書に応用している。まさに「篆書は隸書から学び、隸書は篆書から学んでいる」の言

葉である。人々が鄧石如の書に「蒼勁渾厚（つよく軽々しくない）、緊密堅実（しっかりとして密度がある）」という表現のなかに「綿裹鉄（鉄を綿で包んだように、ふっくらとしてつよい）」と多様な筆致を見出すのは、このためである……とする。

文中の「篆書と草書の筆勢」とは、篆書が筆面の充実を求めて鉄のような強靱な筆跡になるのに対して、草書は筆毫が開いて筆跡が豊潤になることを指す。これが融合されると、穆孝天氏の説に言う鄧石如の「綿裹鉄」が実現されることになるのである。これは包世臣が説明した「逆入平出」による筆跡の表現効果を、新しい視点で述べたものである。

つぎに鄧石如の隸書作品を具体的に挙げて、字姿を扁（ひらべったい）と方扁（四角くひらべったい）の二種に区分けして、さらに扁と方扁の二様が存在することが鄧石如の隸書の特徴とする。これを説明するのに方履錢の鄧石如隸書作品の賛文を引用して、

……（鄧石如の隸書は）普通でありながら変化がある、素朴でありながら巧妙がある、この表現によって筆を用いて字を書いてゆく。それは変わることなく、終始一貫していた。字姿は方（かくばっている）であるが、精神は円（まろやか）である。筆は毫（かたい）であるが、墨（筆跡）は柔（やわらかい）である。枯（かすれ）や潤（にじみ）が自然にできあがり、その精微（玄妙なところ）は無限である……と述べる。

さらに鄧石如の隸書への賛辞として包世臣「奪天時之舒慘、變人心之哀樂」があり、また康有爲「從句容六梁碑出、書法極厚、中辺俱徹、不得以抹筆議之」があり、さらに李兆洛「兀稟排蕩、淋漓盡致、變化不可方物」の句を引用したのちに、鄧石如の隸書について「涵容無盡（すべてを含みいれて尽きず）、境界之高（境地はいっそう高い）」との語により形容している。

#### 4・4、王征（現代）氏の評

「鄧石如隸書作品風格再探」（山東画報出版社『布衣大師―鄧石如』所収 2017）において、過去の分析を検証し、さらに新しい見解を述べている。残念ながら寡聞にして王征氏についての人物と研究内容は不明である。

『布衣大師―鄧石如』は、十八名の執筆者により二十七題を論じた論文集であるが、最近の鄧石如関係の研究書としては中国では最新のものであり、多く刊行されている作品図録や技法解説とは異なり、研究文献の合編として上梓されたものである。近年、続いて鄧石如作品の大型図録が全頁カラーで出版されるなど充実しているが、研究の専著はなく全くの貧相を呈して不満な状況であった。こうした状況を打破したのが『布衣大師―鄧石如』である。内容は穆孝天氏と許佳瓊氏夫妻（共に故人）の過去研究である五論文を掲載する

が、各論考の執筆者は従来見ない方々であり、巻末後記には安慶師範大学・安徽省博物館・安慶市芸術館の諸氏に対する謝辞があることから、安徽省と安慶市に関係する研究者と考えられる。安慶は鄧石如の出身地でもあり、安徽省博物館は鄧石如作品を所蔵して国内最多を誇る公的機関である。なお第五章から第八章にある「詩文摘選」「山人年表」「伝記輯録」「芸術作品（作品図版）」は執筆者名を載せていない。

王征氏「鄧氏隸書風格取法再探析」のうちの第二章「鄧氏隸書風格取法再探析」において、

……包世臣・康有爲による鄧石如の隸書における臨書の対象となった碑名を挙げて、さらに沈子善の説である『史晨碑』『華山碑』を中心として学び、『受禪碑』『乙瑛碑』を加えたことを挙げ、また方朔の説である『史晨碑』前碑後碑を学んで、鄧石如の学書は隸書から始まったこととを挙げている。しかし、鄧石如の臨書作品は現在伝わっていないことから、前述の指摘を検証することはできず、残された鄧石如の隸書作品の文字にその影響を見つめるだけである。そして鄧石如が中年期に『集古字』とよばれたのは、作品中に多様な古典を取り入れて、これを反復し臨書することで融会貫通（とけこんで一体になる）して、ついに自分の隸書を完成させたことは、北宋の米芾の学書過程と共通する……と述べている。

鄧石如の隸書作品がもつ古典学習について識者の見解が一致しないのは鄧石如が諸碑を参考にして作品を揮毫したためであり、そのことは一つの学習過程として是認されるべきであり、先例として王羲之をはじめとする歴代の名人を習い尽くして、その書の出自が判然としなかったことから中年に『集古字』と貶され、のちに『北宋の四大家』に挙げられた能書家の米芾と同様であると主張する。

つぎに、従来からの鄧石如の篆書に対する評にある「隸筆をもつて篆書をなした」について、包世臣の評を引用して隸書と篆書の筆法が相互に深く影響していることを述べ、その融合こそが鄧石如の隸書と篆書に独自性があることを主張して、

……この運筆方法は『袁敞碑』『天發神識碑』また後漢の隸書碑の篆額に見られるものである。そして鄧石如の隸書も「篆筆をもつて隸書をなした」のである。鄧石如五十四歳の『四体書冊』のうちの隸書部分①、無紀年の隸書『世慮全消』四屏について、その書風を検討分析すると二作品には、揮毫年に早晚の違いがあるが、一つは「滄麗妍美（つややかで、はなやか）」であり、一つは「蒼茫老辣（きびしく、はげしい）」と形容することができるが共に「体方勢円（四角の文字構造であるが字姿は丸みをもつ）」である。筆画は、その筆跡の中間に弾力にみち、また「円融沈穩（まろやかさにかに、おだやかさを含んでいる）」なのである。このことは鄧石如が篆書を成就させたために出来たことである。かつて包世

臣が鄧石如の隸書について、『嶧山刻石』『禪國山碑』の筆法を合わせて行っている。だから鄧石如自身が「わたしの篆書は李陽冰には及ばないが、分書は梁鵠には劣らない」といった。わたしはこの言葉にとくに注意している。鄧石如は篆書分書をもって今隸（楷書）を揮毫している、よって『瘞鶴銘』『梁侍中石闕』の筆法と同じである」と述べている。鄧石如の篆書では、殺鋒（藏鋒）によって勁折（かくばっている）となっている。だから字姿はやや四角いというのもやり方は異なるが同じ理由である。つまり、篆書は隸書の筆法を基とし、隸書は篆書の筆法を基としているのである」といえる……と述べている。

最後に、鄧石如の書の従来になく表現性が存在する理由として、生宣紙と長鋒羊毫筆の使用にあることを指摘している。生宣紙は、表面加工を施さず墨のニジミが出やすい紙質である。これは従来、鄧石如における羊毫筆の使用については度々指摘されてきたが、長鋒羊毫筆であること、また生宣紙の使用について言及したものは初めての指摘であろう、

……書画の用紙として、はじめ麻紙・皮紙・竹紙が用いられて、明代中期以後に生宣紙の使用がひろく拡大した。陳淳や徐渭の描く画には墨の濃淡や潤渴（ニジミ、カスレ）が表現の特徴であるが、生宣紙が普及する以前の紙では吸水性に乏しく、こうした表現はできない。鄧石如が活躍した清朝中期は、生宣紙の使用がさらに普及した。現在、見ることの

できる鄧石如の作品は多くが生宣紙を使用したものである。鄧石如に始まった碑学派が理想とした朴厚・古拙・遲滯老辣（じつくりとして手慣れている）の美、また鋪毫直行（中鋒）・中実（筆跡の充実）・用逆（逆入）などの用筆法を実現するためには生宣紙の特質が必要不可欠であった。吸水性のない熟紙（加工紙）では、こういった表現は極めて困難であった。また羊毫筆の効用も生宣紙を使用することで高められた。以前の狼毫・兔毫・鼠鬚などの硬毫筆は弾性には優れているが、墨を含むことは少なく筆跡はわずかに潤うだけで、吸水性の高い生宣紙には適さなかった。これに対して羊毫筆は墨を多く含み、書技が熟練すれば、墨を含ませれば一気呵成に揮毫して数字を続けるには生宣紙が適していた。また鄧石如が活躍した清朝中期において、碑学派の書家が活躍し始めるのと長鋒羊毫筆の使用が盛行した。時に、篆書隸書が復興しようとしていたが、剛毫筆では古朴重厚の金石の気を表現できなかった。秦漢の碑刻の精神に迫る表現をするために、長鋒羊毫筆が注目された。鄧石如は、長鋒羊毫筆を用いて懸腕双勾（腕を机につけず、指を二本かけて筆を持つ）と管随指転（筆管は指にしたがって回転させる）の方法で揮毫した。筆鋒は垂直端正（紙に対して直角にあてる）を常とした。この中鋒で運筆は、どの書体も適強雄（力づくよく、りっぱになる）になるものであり、鄧石如以後の碑学派の書家達は長鋒羊毫筆の表現性を認め、鄧石如を模範とした……と述べている。

①鄧石如五十四歳の『四体書冊』のうちの隸書部分とあるが、「布衣大師—鄧石如」に図版を載せないことから、作品は不明である。ただし筆者（遠藤）の調査によれば五十四歳『四体書冊』は存在しない。おな、翌年五十五歳『四体書冊』のうちの隸書は図13で見ることができるといえる。

#### 4・5、西川寧（1902—1989）氏の評

これまで中国の識者や研究者の見解を年代順に、その要旨を概述したが、ここで我が国における鄧石如の篆書書法についての言及を引いておく。西川寧氏は、中国文学・中国書学の碩学であり、また書の面でも活躍した大家である。ここで細かに言及する必要のないほど、その精緻な研究や知性の凝縮した書作品は、ひろく承知されているところである。

西川氏の論文中とくに鄧石如の隸書について言及する論考①は、年代順に「完白山民がことども」（1936）、「鄧書の風韻」（1941）、「完白山民の慧遠伝八屏」（1955）、「鄧書と私」（1972）、「鄧石如の絶筆」（1973）がある。

①西川寧氏の鄧石如研究については、小稿「鄧石如における篆書筆法形成の理解への試論」（Ⅱ）第四章の第四節に詳述したので参照願いたい。

とくに鄧石如における隸書の変遷について言及している「鄧書の風韻」のうち—鄧隸の演変—から要約して引用する、

……鄧四十四歳の「司馬温公家訓」（図2）は、漢隸の気格と共に、如何にも乾隆の隸書らしい臭味が混じっているが、殆ど磨擦のない柔かい線で朗らかに手足を延して、可なり動きのある結構を持った字である。だが文字の大小も混り、技巧の繊細はどこにもない。五十歳作、富岡氏桃花庵所蔵「七言律詩軸」（図8）では、その根底は従来を離れぬが、その表現は、激しい熱情の爆発にすっかり委ねきっている。嘉慶元年、鄧完白五十四歳であるが、篆・隸を通じて、この頃から卒年六十三に至る十年間は別の一期を劃すると見ていいようだ。高島槐安氏所蔵「陶淵明語冊」（四体書冊のうちの隸書 図13）「大雅・抑草冊」（図14）は、共に五十五歳の作である。情趣的なものと激越なものは、融けて深く内面に向かつて沈降してゆく。技巧的には線が収斂され、結構の分背性が強調され、字の胴体がぬげ目なく引き締められて、空間の特殊な解釈が把握せられる。一種の精確な格調に入って来たのである。嘉慶初頭に於ける隸書の、情熱の内燃と技巧の収斂とから打ち出して来たこの格調は、自己発展の自らかな変化と共に、その裏にやはり更に深い漢魏碑への沈潜が用意されていたのであろう。五十九歳、線質は愈々圧力を増し、結構の擒縦が自由になり、点画の重厚さ波磔の壮麗さが増してゆく。そして豊かな情感は、嘗て把握した手堅い様式の隅々にまで自ずと浸透してゆく。

この年あたりから後を彼の最晩の時期としなければならぬ。六十歳「崔子玉座右銘」(図25)は、えぐりこむ点、筆毫の弾力を利して軋み行く線、この激しい軋みは、至る所線の沿辺に鋸歯状のギザギザを表し、逆筆の激しい所はこのギザギザが縦画の左右にさえ表れる。その堂々たる姿体は些かのゆるぎも見せない。寧ろ不器用であることは、彼の一生を通ずる傾向であった。而もこの素樸にして強烈な表現に拘らず、字々静まり返った安詳と高雅とを示している。古典探求の途はこれを内へ内へと深く沈めて、我と自ら古典の世界に転身蘇生したのである。六十三歳「涇県学宮禮器碑」(図34)、約一寸角の小字だが、見るも目ざましい規範的格調に、ひたぶるの情懷がしんみりと滲み出している。この朗澄は隸書様式の最高の光である……と述べている。

西川氏は、鄧石如の隸書に対して、学書の元となつた隸書碑の特定をしていない。文中では、漢魏碑への沈潜を背景に持つことを挙げる程度であるが、具体的な古典名はない。むしろ鄧石如の用筆と文字構造に視点が置かれているが、それは解説のうえで引導であり主旨は鄧石如隸書の風韻の解釈が主体で、その生成から展開、発展と大成を余すところなく述べたものである。鄧石如四十歳代中頃の生成、五十歳頃からの展開、五十四歳頃からの発展、五十九歳以後の大成として区分している。

## 5. 鄧石如の人物交流からみた書法の影響

5・1、鄧石如の人物交流の整理の進展― 本件については、小稿「鄧石如における篆書筆法形成の理解への試論」(Ⅱ)第五章に詳述したので参照願いたい。

5・2、鄧石如の人物交流の概観― 鄧石如六十三年の生涯を、第一期(鄧石如の誕生と成長)・第二期(書法の確立期)・第三期(人物交流の広がり)・第四期(都での活躍)・第五期(都を離れて、畢沅の幕客となる)・第六期(自邸に鐵硯山房を築き、書家として名声高まる)・第七期(著名書家として活躍、包世臣と出会う、集賢律院との関係深まる)・第八期(晩年、大書家として依頼が重なる)・第九期(没年の大活躍、六十三歳にて逝世)に区分けして検討した。

第一期は、その人生の出発点というべきもので、生涯の方向を決定するといつてよいものである。鄧石如の名にある通り、石の如く、の人生の歩みであり書への精進である。第二期は、古典学習に専心し書法確立のための揺籃期である。第三期は、周囲の人々に書の実力が理解されて、人生の舞台への旅立ちである。第四期は、都での賞賛と排斥という光と影が交錯する一年であった。第五期は、畢沅という大権力者の傍で、権力とそれにすがる人々の間にあって

自己の存在を改めて認識する。第六期以後は、書名があまり書家としての独立期である。第七期は、著名書家として活躍を果たし、鄧石如を理解し顕彰した包世臣との遭遇である。第八期は、書法が最も充実し、代表作といわれる作品や大作をいくつも手がける。第九期は、作品の依頼が集中したことや、家計を支えるために無理を重ねたためか、瞬間に燃え尽きたように急逝した。

第一期（鄧石如の誕生と成長）——先祖は江西省鄱陽縣の出身とされ、鄱陽縣より懷寧縣白麟坂に移ったのは鄧君瑞のとき。鄧君瑞から鄧石如までは、十三世を隔てている（李兆洛『鄧君墓誌銘』）。曾祖父の鄧應朝は、字を若周、号は梅渚という（鄧石如『鄧澹園内碑銘』——『白麟鄧氏宗譜』所載）。祖父の鄧士沅は、字を飛萬、号は澹園という。邑庠（県学の学生・科挙一次合格者）となり、書史に精しかった（鄧石如『鄧北林暨陳孺人内碑銘』——『白麟鄧氏宗譜』所載）。父の鄧一枝は、字を宗兩、号は北林という。別号に木齋・迴道人がある。博学にして多通であり、四体書を工みにした。もともと篆籀を得意とし、篆刻をよくした。性格は自尊心が高く世俗と交わらず、よく怒りをあらわした（鄧石如『鄧北林暨陳孺人内碑銘』——『白麟鄧氏宗譜』所載）。こうした系譜からは、鄧石如が中国における知識人の終生の目標であった科挙を受けるには、とても十分な学習環境や経済的な支援は、その誕生から望むことはできないものであった。

このことは何より鄧石如自身が、理解していたことではないだろうか。鄧石如の少年期の様子は、その実態を如実に記している。

九歳、父に従って、読書すること一年（鄧以螫『鄧石如法書選集』前言）。年不詳、幼くして貧しく、学問することができなかった。村の子供たちと薪を拾い、また餅餌を売って生活の助けとし、暇をみつけては諸長老に経書の句読について教えを受ける（李兆洛『鄧君墓誌銘』）。十三・十四歳、心ひそかに、書物を好んだ（李兆洛『鄧君墓誌銘』）。十九歳、祖父の士沅、亡くなる（『鄧氏宗譜』）。二十歳春、父に随って壽州に行く。塾師となったが、生徒が飛び跳ねて学問をしないので辞める。刻印と篆書・隸書を書いて、町で売る（李兆洛『鄧君墓誌銘』所載）。こうした僅かな記述が、鄧石如の苦学の真相の一端を伝えている。二十一歳、母の陳氏が亡くなり、ついで妻の潘氏が亡くなる（『鄧氏宗譜』）。二年前に祖父が亡くなり、この年、もともと身近な母親と幼い妻を亡くして、鄧家には、父と十歳下の弟と鄧石如の三人が男子として残り、そのうち稼ぎ頭にならないければならなかったのは鄧石如であった。鄧家の生計は、鄧石如一人に拠ることになったのである。ここから三十歳までの詳しい記録はない。三十歳、始めて北京に行き、途中の各地に遊ぶ。多くの賢士大夫は貧しい衣服であった鄧石如を相手にせず、鄧石如もそれを望むことではなかった（『鄧氏宗譜』）。郷里を離れることは、鄧石如



にとつて物見遊山ではなかつたはずである、わずかに身に付けた教養と刻印・篆書・隸書を書くことだけが身を助け、家族を養うための手段であつた。しかし、名士たちは、その身なりから接することすら許さなかつた。鄧石如の屈辱は、いかばかりであつたことであらうか。

鄧石如の若年の書作や刻印の様子は、葛昌楹『鄧印存真』に載せられた子息鄧傳密の跋文に詳しい。その書作と刻印の様子について、……父（鄧石如）は祖父（鄧石如の父である鄧一枝）の葬儀を終えたのち各地に旅をした。途次に必ず金石の文字を訪ね、また賢者に教えを受けた。雨風にあたつても、いにしえを思い精神を高揚させた。心にしたがつて書をなし、胸中の鬱勃を表現した。数日してまた遊び、疲れては書をなすことは変わらなかつた。このため父の書は流伝して、今も残されて見ることが出来る。刻印は、ただ壮年の頃に手がけただけであつた。刻印の依頼は一日でこなさなければならず、依頼者を選ぶことはできずに与えていた。印を手に入れた人も、気にかけていないで大切にしなかつたので、今残っているものは千のうち一つもないであらう（原文中国語・遠藤訳―『東園還印圖』序稿）……と記している。

これを読むと、鄧石如の壮年期の姿が眼前に見るように書かれていて、印は多作であつたにも関わらず印材そのものの伝来はきわめ

て少なかつたことがわかる。文中の「其存於今、千無一焉（その今に存するもの、千に一無し）」とは、まさに鄧石如が背負つた人生の試練との格闘の有様であつた。

第二期（書法の確立期）―三十六歳、程瑤田と出会う。程瑤田から受けた学書は、最初の本格的なものであつた。

三十八歳春、揚州（江蘇省）に寓居し、程瑤田と交友して約半年。篆書・隸書、始めて獲ると述べる①。夏、南金（江蘇省）に行き、梅鏐の家に客居すること約半年。これ以後、八年にわたり梅家にて書を学び、とくに篆書・隸書を習得する。

①鄧石如墨跡には「憶自庚子歲、余學篆隸於揚州之地藏庵僧舍、先生適出都門、過此地。見余臨古有獲、歸寓檢行篋中書帖數十事、借余抄録臨摸、徹晝夜不休。並手録所著書學五篇貽余、余朝夕揣摩、且時聆議論、余書始獲張主。今余篆隸書見稱於世、皆先生教也」とある。

第三期（人物交流の広がり）―四十二歳春、南金（江蘇省）の梅鏐の家に滞在して、徐嘉穀と交流を結ぶ。のちに鄧石如・梅鏐・徐嘉穀は伴つて鹽城（江蘇省）に行く。徐鐸（徐嘉穀の父）墓の篆蓋・書丹をする。月不詳、鹽城にて、沈氏と再婚する。九月、懷寧（安徽省）から金陵（江蘇省南金）に過客し、梁讖に印を贈呈する。

四十三歳月不詳、梁讖から臨書『淳化閣帖』を贈られる。月不詳、

黄山に遊ぶ。金榜の家に宿客して、張惠言と面会する。張惠言に篆書を教える②。金榜は賓客として待遇し、自宅の書を依頼して敬服する。張惠言は、鄧石如に篆書を一年間学ぶ。

②鄧石如隸書『司馬溫公家儀冊』にある張惠言の跋文には、「懷寧、鄧布衣石如。攻爲小篆・八分。歲丙午、余遇之於歙縣。此卷其時所書也。余之知篆書、由識石如。石如之書一以古作者爲法、其辭關俗陋廓如也」とある（『茗柯文初編』所載）。

四十四歳六月、黎齋先生のための隸書（拓本）韓愈「岐陽石鼓歌」（図1）を揮毫する。同六月、金榜の推薦により、太子太傅・戸部尚書の曹文植と面会する。曹文植は卷子四体書『千字文』を依頼し、鄧石如の長寿を願ひ五百金を謝礼とする。秋、杭州（浙江省）にて友人との出会いを喜び、姚鼐の詩に次韻して詠詩する。月不詳、隸書冊頁『司馬溫公居家雜儀』（図2）を揮毫する。

四十五歳一月一日、武漢（湖北省）にて黄鶴樓に登り詠詩する。夏、南京を過ぎ、揚州（江蘇省）に行く。四月、一子が生まれるが難産で亡くなる。同月、父の一枝、亡くなる。秋、鎮江（江蘇省）に行き、金山・焦山に登り北固山に遊ぶ。越（浙江省）に行く。天臺山・雁蕩山に遊び、新安江から歙縣をへて、黄山三十六峯を廻る。十一月十六日頃、安慶（安徽省）にて、小卿・幼卿女史の詩（乾隆五十三年三月詠詩）に唱和して七言律詩二首「登大觀亭詩」を詠詩

する。月不詳、程瑤田に随行して、呉門・虎丘（江蘇省蘇州）に遊ぶ。

四十六歳十月、揚州（江蘇省）にて、孔雲谷・葉天賜・羅聘・顧塋のために刻印する。秋、揚州にて、隸書立幅「歐陽永叔入……」（図3）を揮毫する。

第四期（都での活躍）——四十八歳四月、蓮西閣主人のための隸書立幅「至仁山銘」（図4）を揮毫する。六月、曹文植に同行を求められるが断り、三日後に出立し開山（湖南省）で出会ったのち都の北京に行く。六月、劉墉・陸錫熊と面会する。劉墉は鄧石如と書を論じて、互いに最も信頼した。伊秉綬・桂馥などは鄧石如には及ばないとした。鄧石如は北京にあって、盤山・西山・昌平十三陵を遍遊して、居庸關まで行く。秋、北京にて詠詩する。羅聘は鄧石如のために「登岱圖」を作画して、鄧石如は刻印して羅聘に贈る。十月、羅聘のために朱文印「亂插繁枝向晴昊」を刻印する。十月、北京にて四体書四屏（隸書幅「伯耳學琴於……」図5）を揮毫する。十一月、北京にて四体書四屏（隸書幅「劉慧斐字宣……」図6）を揮毫する。

第五期（都を離れて、畢沅の幕客となる）——四十九歳春、劉墉は左遷され、陸錫熊は亡くなり、鄧石如を評価するものがいなくなった。都では篆書・隸書を能くするものは、翁方綱を宗師として仰いでいたが、翁方綱は挨拶に来なかつたことで鄧石如を排斥したとされる。

三月、揚州（江蘇省）の寒香僧舎にて、篆書四屏『詩經』（南陔篇）を揮毫する。秋、鄧石如は、排斥されたことで都を出て、揚州をへて武漢（湖北省）に行き、畢沅の幕客（賓客待遇）となる。

五十歳春、武漢に寓居し、洞庭湖にて舟に乗る。衡嶽に登り『岫巖碑』を訪ね、大別山に遊び岳陽樓に登る。九月、畢沅の政務所にて孫雲桂から『完白山人傳』を贈られる。秋、武漢の政務所の榮華館にて梅鏐のための隸書詩卷「竟日意無頼……」（図7）を揮毫する。十一月七日頃、孫雲桂のための自詠詩の行書冊頁を揮毫する。十二月、『鄧北林暨陳孺人内碑銘』を著す。鄧北林は父鄧一枝の号、陳氏は母の姓。十二月、隸書立幅「磯邊鶴去蘇……」（図8）を揮毫する。

五十一歳春、隸書立幅「到來忽訝有……」（図9）を揮毫する。六月、武漢にて、徐嘉穀と面会する。秋、湖北學政の查瑩が北京に帰養を願ひ出る。秋、武漢の政務所の榮華館にて、梅鏐のための隸書詩卷を揮毫する。十月、武漢の天香書屋にて、湘岳六哥のための四体書冊頁（隸書「到來忽訝有……」図10）を揮毫する（包世臣の跋文）。十二月二十二日頃、畢沅の代書として、『祀三公山碑』の字を集めて鄧氏宗祠の隸書八言聯（畢沅の代筆）「領迴山幽流……」（図11）を揮毫する。冬、畢沅の政務所を辞す。畢沅より、老後のためとして千金と畢沅手製の鐵硯が与えられた。武漢より自邸のある懷

寧（安徽省）にむかい、白麟坂に帰る。月不詳、湘岳六哥のための四体書冊頁（隸書・楷書のみ残存）のうち隸書「蓬州登萊閣……」を揮毫する。

第六期（自邸に鐵硯山房を築き、書家として名声高まる）——五十二年秋、隸書七言対幅「萬華盛處松……」（図12）を揮毫する。十二月、『鄧梅渚内碑銘』を著す。鄧梅渚は、曾祖父の鄧應朝のこと。五十三歳二月、弟の鄧惟璠（字は永玉、号は璞軒）亡くなる、卒年四十四歳。月不詳、白麟坂にある老屋の側に房を築き「鐵硯山房」と命名。十月、長男鄧尚璽（のちの傳密 1795—1870）、生まれる。

五十四歳、改元して嘉慶の年号となる。一月、名の琰が帝諱（顯琰）に触れることから、琰を改め字の石如をもって名とし、字を頑伯とする。春、白蓮教徒の乱のため、出遊できなかった。秋、南金（江蘇省）に遊び、揚州（江蘇省）に行く。冬、揚州から鎮江（江蘇省）に行く。南金を過ぎ、安慶に帰る。鎮江を過ぎたとき、袁廷樞が贈ってくれた鶴二羽を攜えて帰り、鐵硯山房にて飼育する。

五十五歳七月十五日、蘇州（江蘇省）の江深草閣にて四体書冊頁（隸書「少學琴書偶……」図13）を揮毫する。秋、蘇州の画師の丁君、『鄧石如脱帽圖』を作画する。十月十六日、醉墨軒にて隸書冊頁「抑抑威儀維……」（図14）を揮毫する。

五十六歳秋、鎮江に再遊する。金山に登り、宿して江樓を望む。焦山の松寥閣に宿過する。十月、皖城（安徽省安慶）の峻爽樓にて七言絶句を詠詩する。十一月、南金（江蘇省）にて、勉堂先生（湯擴祖のこと）のために篆書七言対幅を揮毫する（二十年前、鄧石如三十六歳のとき、湯擴祖のために両面印・白文「太羹玄酒」・朱文「聊浮游以逍遙」を刻している）。十一月、眼病になり制作に差し支える。

第七期（著名書家として活躍、包世臣と出会う、集賢律院との関係深まる）――五十七歳十一月、揚州（江蘇省）にて、肯園太老先生のための四体書冊頁（隸書「焚香看書人……」**図15**）を揮毫する。

五十八歳月不詳、揚州（江蘇省）に寓居する。四月、揚州にて、篆書五屏「徽國文公四齋之銘」を揮毫する。四月、鹽城（江蘇省）にて、『沈氏宗譜』の序を作る。

五十九歳四月、安慶（安徽省）の集賢律院にて、淑先親家先生のための四体書四屏（隸書「僕々長安道……」**図16**）を揮毫する。四月、安慶の集賢律院にて、隸書冊頁『張氏西銘』「乾稱父坤稱……」**（図17）**を揮毫する。六月、金榜が亡くなり、挽聯を書く。七月十六日、隸書八言対幅「甘露卿雲於……」**（図18）**を揮毫する。冬、甸園二兄大人のための隸書立幅「贈甸園」「清源之體勢……」**（図19）**を揮毫する。十一月、竹亭大兄のための隸書立幅「霍去病志得……」**（図20）**を揮毫する。十二月二十四日、揚州（江蘇省）の是亦草堂に

て、隸書立幅「絶照覽心圓……」**（図21）**を揮毫する。冬、袁廷極から贈られた雌鶴死ぬ。残った雄鶴を、安慶の集賢律院に寄託する。六十歳一月、後妻の沈氏、亡くなる。一月、揚州（江蘇省）の是亦草堂にて行草書立幅を揮毫する。三月、懷寧（安徽省）に帰る。五月、横額隸書（拓本）『集賢律院』**（図22）**を揮毫する。秋、鎮江（江蘇省）にて、はじめて包世臣と面会する。包世臣、十余日を鄧石如と共に過ごし書を学ぶ。包世臣『完白山人傳』には「余在鎮江初識山人時、嘉定錢坫獻之、陽湖錢伯坻魯斯先生、皆與余爲忘年交」とあり錢坫と錢伯坻とも出会っている。また『完白山人傳』には「及見山人作書、皆懸腕雙鉤、管隨指轉」と述べて、鄧石如の執筆法についての実見の様子を述べ、懸腕にして雙鉤、管は指に隨ひて轉ず」という。ほかに包世臣『述書』には「是年（壬戌をさす）又受法于懷寧鄧石如頑伯。曰、字疏處要以走馬、密處不使透風。常計白以當黒、奇趣乃出。以其論驗六朝人書悉合」とあり、鄧石如の書論として有名な、字の疏なる處は馬を以て走らせんことを要し、密なる處は風をも透さ使むべからず、の句を授けている。秋、一万錢をもって、安慶（安徽省）の集賢律院の蘭臺和尚の架屋を助ける。十一月、鳴吉將世長翁のための隸書立幅を揮毫する。十二月、隸書隸書八屏「廬山東林法……」**（図23）**を揮毫する。十二月二十二日頃、鳴吉將世長翁のための隸書立幅「懷抱屬不展……」**（図24）**を揮毫

する。十二月二十二日頃、隸書横披『崔子玉座右銘』(図25)を揮毫する。月不詳、程氏と再々婚する。

第八期(晩年、大書家として依頼が重なる)――六十一歳一月、揚州の大明寺にて一ヶ月余を寓居して篆書『般若波羅蜜多心經』を書き、壁中に刻字するのを自ら監督する。二月、皖(安徽省)に帰る。

二月十五日、七言律詩『宿集賢律院作』詠詩して隸書冊頁(拓本)『竹樹陰濃梵……』(図26)を揮毫する。二月、安慶知府の樊晉に宛て、鶴の返還を要求する尺牘『陳寄鶴書』を揮毫する。月不詳、鶴の返還が行なわれたことにより七言絶句二首『鶴歸誌喜』詠詩する。五月、鎮江(江蘇省)に行く。六月、包世臣に宛てて尺牘を揮毫する。夏、揚州(江蘇省)に行く。ふたたび包世臣と面会する。八月、『完白山人放鶴圖』完成。図は、雲陽の黄景峰による作画。丹徒の閻竹賓による補図。九月、次男の鄧尚保、生れる。秋、南京(江蘇省)に遊ぶ。蓮莊四兄親家のための隸書四屏『寄懷師荔屏明府詩』『穉來漸次起……』(図27)を揮毫する。冬、安慶に帰る。十二月、安慶(安徽省)にて、望江縣令(安徽省)の師荔屏のための『春宵佇月圖』に隸書四字「是真面孔」を題する。

六十二歳、夏、揚州(江蘇省)にて、程伯厚と面会する。『程瑤田八十壽序』を作文。四月、揚州にて、隸書立幅「戰々慄々日……」(図28)を揮毫する。五月、左輔のための篆書六屏『白氏草堂

記』を揮毫する。六月、李天激のための草書五言対幅を揮毫する。六月、揚州にて七言絶句四首を詠詩する。夏、興嚴佛廬にて、見初禪友のための草書五言対幅を揮毫する。秋、濟寧(山東省)の碧山書屋にて、後圃五兄のための隸書対幅「滄海日赤城……」(図29)を揮毫する。秋、東遊して山東から常州に行く。八月十日、濟寧(山東省)の碧山書屋にて、後圃五兄先生のための隸書卷子『碧山石銘』を揮毫する。揚州を過ぎたが、街に入らなかつた。月不詳、濟寧(山東省)にて、吳文澂に依頼して『載鶴圖』を描かせる。八月、濟寧の碧山書屋にて、後圃五兄先生のための隸書卷子『碧山石銘』と隸書対幅を揮毫する。秋、濡水(安徽省巢縣)にて五言律詩を詠詩する。十月、礪山(安徽省)の署中にて、孫氏のための両面印(朱文「燭湖孫氏」・朱文「世濟忠清」)を刻す。十月、隸書八屏『西都賦』(図30)を揮毫する。十月、拙存七兄先生のための篆書立幅『廬山草堂記』を揮毫する。十一月、常州(江蘇省)の李兆洛の辨志書塾にて篆書八屏『管子』弟子職を揮毫する。十一月、常州にて、五初のための楷書七言対幅を揮毫する。十一月、海門鬢翁のための篆書四言対幅を揮毫する。冬、鎮江(江蘇省)にて、袁岸夫のために七言律詩を詠詩し、行書立幅を揮毫する。十一月下旬、張琦の依頼により心盦鬢翁のための隸書七言対幅「元龍未除湖……」(図31)を揮毫する。十一月末、鄧石如是家からの帰郷を促す手紙

を受け取ると、すぐに揚州に行った。天心墩で包世臣を訪ねるが遇えないまま帰郷した。

第九期（没年の大活躍、六十三歳にて逝世）——六十三歳春、自宅にて、楷書屏を揮毫する。二月、雷陽（安徽省望江縣）の署齋の小停雲館にて、篆書六屏の程頤『非禮勿言箴』を揮毫する。二月下旬、隸書八屏『張子東銘』を揮毫する。四月、安慶（安徽省）の集賢律院に寄託した雄鶴が死ぬ。僧の蘭臺和尚、これを埋葬して立塔。五月五日、隸書六屏『易經』謙卦「謙亨君子有……」（図32）を揮毫する。五月、左輔のための篆書八言対幅・篆書横披『念宛齋』を揮毫する。六月六日、山口鎮（安徽省懷寧縣）の裁雲補納之廬にて、隸書八屏『張氏東銘』『横渠張先生……』（図33）を揮毫する。七月、安慶の集賢律院にて、蘭臺和尚のための隸書十屏『敖陶孫詩評』を揮毫する。八月、卷石山房にて、程荃のための篆書冊頁を揮毫する。九月、涇縣（安徽省）にて、石碑の隸書『涇縣學宮禮器碑』（図34）を揮毫する。秋、篆書四屏『謁余忠宣公墓詩』を揮毫する。月不詳、隸書十屏『敖陶孫評』「敖陶孫評魏……」（図35）を揮毫。十月四日、自宅にて亡くなる、六十三歳。何紹基『鄧完白先生墓誌附記』には、「乙丑秋、鶴在僧院與巨蛇鬪死。先生時在涇縣、書孔廟禮器碑方竟、遽得疾歸、遂以冬初不起」と記し、<sup>レ</sup>にわかにな病を得て歸へる、ついに冬初（十月のこと）をもって起たず<sup>レ</sup>とあることから、その最

期の様子が急逝であったことを伝えている。

5・3、真に鄧石如に影響を与えた程瑤田と金榜——「贈程瑤田八旬壽序」は、嘉慶九年甲子（1804）鄧石如六十二歳の作文である『程瑤田八十壽序』のことである。程瑤田の八十歳の誕生を祝書して作られた。この文中に、鄧石如三十八歳（乾隆四十五年庚子1780）春、揚州（江蘇省）に寓居しており程瑤田との交流の様子を、

……憶自庚子歲、余（鄧石如のこと）學篆隸於揚州之地藏庵僧舍、先生（程瑤田のこと）適出都門、過此地。見余臨古有獲、歸寓檢行篋中書帖數十事、借余抄錄臨摸、徹晝夜不休。並手録所著書學五篇貽余、余朝夕揣摩、且時聆議論、余書始獲張主。今余篆隸書見稱於世、皆先生教也。

思い返せば庚子の歳に、私は篆書・隸書を揚州の地藏庵僧舍で学んでいた。先生は都への旅の途中に揚州に立ち寄った。私の臨書を見ると、宿舎に戻り手持ちの書帖数十種を取り出して、貸し与えられた私は、これを抄録臨摸して晝夜をかけて止むことが無かった。また先生の著作になる『書學』五篇を私に与え下さった。私は朝夕に手離すことなく読み、時に教えを頂いた。私の書法はここに始まったのである、いま私の篆書・隸書は評価されるところとなったが、すべては先生の教えによるもので

ある……と述べている。

鄧石如の篆書・隸書の出発は、三十八歳のときの程瑤田からの指教にあつたことが真実である。

鄧石如五十九歳（嘉慶六年辛酉、1801）、金榜の逝去に対して挽聯（追悼の言葉）と引言（挽聯の序文）を作文した。その文章には、乾隆四十六年辛丑（1781）三十九歳（月不詳）新安（安徽省安慶）に遊び芥子庵に居して、程瑤田の仲介による金榜との出会いについて、

……寄輓黎齋（金榜のこと）先生靈幾。噫、先生竟歿也耶。憶自程葺翁徵君（程瑤田のこと）介而來見、蒙清賞以來、悠悠近二十年矣。一筭橫肩、或歲而至、或間歲而一至。先生忘其貴、余忘其賤、款々相接。頽濱一室、寢斯食斯、不厭不倦、此情亦足千古也。每看余（鄧石如のこと）作篆、嘖々讚不已。曰、真唐監後一人。宋元以至今日、無有加於君（鄧石如のこと）者、勉之勉之。余常感激於心、不日忘也。

金榜先生の御霊に輓をよせる。ああ先生、とうとう亡くなられてしまったのか。思い返せば程瑤田翁の紹介により、私の作品を評価して頂いて以来、はるかに二十年を迎えた。私は旅の袋を肩にして、一年を過ごし、また年をまたいで過ごしていた。先生はご自分の尊い身分をお忘れになり、私は我が身の無位を忘れ、真心をもって交際した。頽水の浜辺

の一室では、寢床ともにし、ともに食事をとっても、心にわずらわしさはなかった、この先生の心は終生忘れることはない。先生は私の篆書を見るたびに、しきりに褒めて止むことがなかった。その言葉は「宋元から今日にいたるまで、あなたのような人はいなかった。努力しなさい、努力しなさい」と。私は平素これを、心に刻んで、一日も忘れたことがなかった……と述べている。

包世臣『完白山人傳』には、

……編修（張臯文のこと）見山人書於市。歸語修撰（金榜のこと）遂冒雨偕詣山人於市側荒寺、修撰即備禮客山人。

張臯文は、鄧石如の書を町で見て、帰宅すると金榜に話した。すると雨が降るなか、二人で町はずれの荒れ寺に鄧石如を訪ねた。金榜は、すぐに礼をととのえて客人とした……と述べている。

この記事が、包世臣による演出脚色というべきもので、全く事実とは異なるものである。金榜との面会は程瑤田の紹介によるものであり、張臯文との面会は、この後のことである。

5・5、人物交流から見た鄧石如の隸書への影響のまとめ―以上、鄧石如の自身の隸書に対する言葉は、程瑤田と金榜との交流についての言及に限られるようである。また、具体的な篆書筆法や運筆などについてのものではない。

鄧石如にとって、程瑤田からは本格的な書法の伝授があつて、このことが篆書と隸書の筆法の上で大転換があつたことは間違の無いことであろう。この点について、現在見ることのできる作品から推測すると、篆書においては筆鋒の切り揃えや焼き留めなどの加工をやめて、楷書・行書・草書で用いている日常の筆である羊毫筆を用いたことが考えられる。また隸書においては、起筆における逆入蔵鋒による用筆の習得が考えられる。

鄧石如においては、この隸書の逆入蔵鋒は、篆書よりも先に技法が確立した。この確立の時期を、作品では乾隆五十七年壬子（1792）五十歳十二月の隸書立幅「磯邊鶴去辭……」（図8）に置きたい。この筆法をもつて、篆書に応用して成功したのが乾隆五十八年癸丑（1793）五十一歳十二月の畢沅の代筆である篆書八言聯「領迴山幽流……」（図11）に見ることができ。純粹な小篆体ではなく隸書の筆法を加味した『祀三公山碑』から集字したものであるが、かえって隸書筆法との融合を得やすかつた可能性は十分考慮できる。

金榜との交流は、鄧石如の生涯をとおしての心的な支柱となつたようであるが技法的な影響を窺い知ることはできない。しかし、程瑤田と金榜の二人からの影響は、それまでに血縁からも学問の師系からも師を持つことがなかつた鄧石如にとっては、何よりの理解者

であり、人生の最初に巡り合つて、その生涯を応援してくれた運命の人々であつた。

また、梅鏐との交流でも、八年間の滞在でなかつたことは、すでに鄧石如の足跡から証明されている。しかし、梅鏐はじめ梅家への人々に対して刻された多数の印は、その交流が広がつていたこと、また多くの交流の時間があつたことは言を俟たない。ただ、それが包世臣の『完白山人傳』が語る鄧石如の学書の様子とは異なるものであつた。それは金榜との面会が脚色によるものであつたように、梅鏐との交流でも潤色され誇張されたものであつた。

## 6、鄧石如の有紀年隸書作品からみた書風の変遷

隸書に関する用語についての整理――すでに、第三章の鄧石如以前とその後の隸書の概観で述べた通り、前漢の後期には『魯孝王刻石』『萊子侯刻石』がある。後漢になると崖面（摩崖ともいう）に刻された『開通褒斜道刻石』（参考1）がある。いずれも直線化した筆画で書かれ、篆書からは完全に異なつた書体となつて、古隸と呼ばれている。後漢の後期には『石門頌』『乙瑛碑（参考2）』『禮器碑』『史晨碑』『西狹頌』『曹全碑』『張遷碑』があつて漢隸の代表とされるが、いずれも、八分隸（または分隸）と呼ばれている。

しかし、第四章「鄧石如隸書作品についての諸家の言及」の第一



節「包世臣の評」の追考―包世臣における隷書と分書について―で詳述した通り、包世臣における「隷書」と「分書」の概念は別にある。包世臣が神品と評価した隷書とは、鄧石如の条幅作品に見る筆力を充滿させた（大字）隷書であり、冊頁にみる流麗典雅な（小字）隷書は分書であつて、文字の様式美の違いを基準とするものではない。

鄧石如の有紀年隷書作品からみた書風の変遷―第四章の第五節「西川寧氏の評」で述べた西川氏「鄧書の風韻」にある―鄧隷の演变―の説が委曲を尽くしていることから、これに基づいて論述していく。西川氏が述べた鄧石如の隷書の変遷は、(Ⅰ)鄧石如四十歳代中頃の生成、(Ⅱ)五十歳頃からの展開、(Ⅲ)五十四歳頃からの発展、(Ⅳ)五十九歳以後の大成という区分である。具体的な隷書の年代順の変遷は稿末に参考7を載せたので、参照願いたい。

乾隆五十一年丙午（1786）四十四歳から、没年の嘉慶十年乙丑（1805）六十三歳の九月までで三十五件である。

鄧石如四十歳代中頃以前、次に述べる前段階（第五章における第一期～第二期にあたる、以下同じ）―乾隆五十年乙巳（1785）四十三歳以前に確認できた有紀年作品は、乾隆四十三年戊戌（17

78）三十六歳にはじまり篆刻十五件・篆書二件・楷書二件の計十九件であるが、隷書作品は確認できない。

三十八歳春、揚州（江蘇省）に寓居して、程瑤田と交友して約半年。篆書・隷書、始めて獲ると述べるが具体的な内容は不明である。そして、この年の夏以後八年にわたる梅家での学書のうち、とくに篆書・隷書を習得したことが、次の柔毫筆と逆入蔵鋒を試みた隷書筆法の模索期へ継承されてゆく。

(Ⅰ)鄧石如四十歳代中頃の生成、柔毫筆と逆入蔵鋒を試みた隷書筆法の模索期（第三期～第四期）―四十四歳の韓愈「岐陽石鼓歌」  
「韓文公岐陽……」隷書拓本（図1）は、同年の真跡隷書冊頁「司馬温公居家雜儀」  
「文正司馬温……」（図2 参考7）と同じ内容の運筆である。筆画は柔弱で逆入蔵鋒が安定せず横画は不安定である。四十六歳の隷書立幅「歐陽永叔入……」（図3）は図1図2に比べ安定するが筆画の柔弱さを脱却していない。

四十八歳の隷書立幅「至仁山銘」  
「峰横鶴峰水……」（図4 参考7）は筆画が安定して分隸としての完成に近い。また包世臣「完白山人傳」における隷書学習の対象となった碑名に挙げられていないが、作品落款に「摸『酒泉福祿碑』筆意」が書かれていることから臨書ではないが倣書であることは理解できる。

追考―『酒泉福祿碑』について―『酒泉福祿碑』は諸書を調べたが、該当する同名の碑を見つけることは出来なかった。しかし作品の書風は、波磔を強調した『曹全碑』に酷似していることは容易に指摘できる。そこで、『曹全碑』碑文の十行目に「光和」七年三月。除郎中。拜酒泉福祿長……」の句があり、おそらくこの句を題名にして『酒泉福祿碑』としたものと考えられる。この背景には、鄧石如が頒布のための作品に『曹全碑』では似つかわしくないと配慮から、吉語である『酒泉福祿碑』としたのではないだろうか。この点について、識者の批正を俟ちたい。

同年の四体書四屏のうちの隸書幅「伯耳學琴於……」(図5)と四体書四屏のうちの隸書幅「劉慧斐字宣……」(図6)も同様の書風である。

交流した人物には梁嘯・金榜・張惠言、さらに曹文植・姚鼎がいる。四十八歳六月、曹文植の誘いによって都の北京に行く。北京では、劉墉・陸錫熊と面会し書を絶賛され、著名画家である羅聘とも交流する。四十九歳秋、鄧石如は、翁方綱からの排斥により都を出て、揚州をへて武漢(湖北省)に行き畢沅の幕客(賓客待遇)となる。

(Ⅰ) 五十歳頃からの展開、柔毫筆による逆入藏鋒の用筆が確立する(第五期、第六期前半)―五十歳の隸書横披「竟日意無頼……」(図7 参考7)は逆入藏鋒の用筆が確立し横画に充実が見られる。同年の隸書立幅「磯邊鶴去蘇……」(図8 参考7)は、包世臣が神品として説くところの隸書の完成が見られる鄧石如の隸書芸術の初めての頂点というべきものであろう。

五十一歳の隸書立幅「到來忽訝有……」(図9)また同年の四体書冊頁のうちの隸書冊頁「蓬州登萊閣……」(図10)は同様で柔弱である。また同年の隸書八言聯(畢沅のための代筆)「領迴山幽流……」(図11)は隸書と篆書を融合させたもので「祀三公山碑」に似たものである。五十一歳の三種(図9、図11)の作品に見る書風の相違は、隸書と篆書の融合を模索した時期で、その後の鄧石如の隸書に対する運筆の信念を確立させた時期といえよう。五十二歳の隸書七言聯「萬華盛處松……」(図12)の筆跡は柔毫筆を用いながらも重厚な表現している。

五十一歳冬、畢沅の政務所を辞す。畢沅より、老後のためとして千金と畢沅手製の鐵硯が与えられた。武漢より自邸のある懷寧(安徽省)にむかい、白麟坂に帰る。五十三歳、白麟坂にある老屋の側に房を築き「鐵硯山房」と命名する。

(Ⅲ) 五十四歳頃からの発展、柔毫筆による逆入藏鋒の用筆が充実する(第六期後半～第七期初め) — 五十五歳の四体書冊頁のうち隸書「少學琴書偶……」(図13)、同年の隸書冊頁「抑抑威儀維……」(図14 参考7)は包世臣が神品と評価した冊頁にみる流麗典雅な分書(小字)である。また五十七歳の四体書冊頁のうちの隸書「焚香看書人……」(図15 参考7)も同様である。

五十四歳、改元して嘉慶の年号となる。春から夏にかけて、白蓮教徒の乱のため出遊でできなかった。五十六歳十一月、眼病になり制作に差し支える。

(Ⅳ) 五十九歳以後の大成—隸書筆法に魏隸を融合させて漢隸様式と魏隸様式を完成させ、後に「鄧隸」と称される独境を確立する(第七期初め～第九期) — 五十九歳の四体書四屏のうちの隸書「僕々長安道……」(図16)、同年の隸書冊頁「張氏西銘」「乾稱父坤稱……」(図17)、同年の隸書八言聯「甘露卿雲於……」(図18)、同年の隸書立幅「贈甸園」「清源之體勢……」(図19)、同年の隸書立幅「霍去病志得……」(図20)、同年の隸書立幅「絶照覽心園……」(図21)は共に従前の扁平から方角に近い字姿をしていて、この頃に魏碑への融合を試みた時期で、これ以後、鄧石如晩年の隸書の大

成を見ることができ。

六十歳の隸書「集賢律院」(図22)、同年の隸書八屏「廬山東林法……」(図23 参考7)、同年の隸書立幅「懷抱屬不展……」(図24)、同年の隸書横披「崔子玉座右銘」「無道人之短……」(図25 参考7)、六十一歳の隸書冊頁「宿集賢律院作」「竹樹陰濃凡……」(図26)、同年の隸書四屏「寄懷師荔扉明府詩」「穉來漸次起……」(図27)、六十二歳の隸書立幅「戰々慄々日……」(図28)、同年の隸書聯「滄海日赤城……」(図29)、同年の隸書八屏「西都賦」「前乘秦峰後……」(図30)、同年の隸書七言聯「元龍未除湖……」(図31)、六十三歳の隸書六屏「易經」謙卦「謙亨君子有……」(図32 参考7)、同年の隸書八屏「張氏東銘」「橫渠張先生……」(図33)、同年の隸書石碑「朱新園捐鑄祭器碑」篆額「朱新園捐鑄祭器之碑」碑文「涇懸學宮禮……」(図34)、同年の隸書十屏「敖陶孫評」「敖陶孫評魏……」(図35)。以上の六十歳から六十三歳までの隸書作品は、立幅・対幅、横披・四屏・六屏・八屏・十屏とあって、いずれもが鄧石如の隸書を代表する傑作である。とくに六十歳の隸書八屏「廬山東林法……」(図23)と六十三歳の隸書八屏「張氏東銘」「橫渠張先生……」(図33)に見る魏碑に基づいた莊嚴重厚の美と、六十歳の隸書横披「崔子玉座右銘」「無道人之短……」(図25)と六十二歳の隸書立幅「戰々慄々日……」(図28)と六十三歳の隸書六屏「易

經「謙卦」「謙亨君子有……」(圖32)と同年の隸書十屏「敖陶孫評」「敖陶孫評魏……」(圖35 参考7)に見る漢魏碑を融合させた遒勁簡古の美は、包世臣が説くところの最高評価である神品を具現したものとと言える。

六十歳秋、鎮江(江蘇省)にて、はじめて包世臣と面会する。包世臣、十余日を鄧石如と共に過ごし書を学ぶ。包世臣に「及見山人作書、皆懸腕雙鉤、管隨指轉」「是年(壬戌をさす)又受法于懷寧鄧石如頑伯。曰、字疏處要以走馬、密處不使透風。常計白以當黑、奇趣乃出。以其論驗六朝人書悉合」と述べ、書の奥義を授ける。晩年、大書家として依頼が重なり、多数の代表作を残す。

## 結語

第一章「鄧石如の有紀年隸書作品目録」では、有紀年隸書作品を編年整理し、その全貌を概観した。第二章「鄧石如篆書作品の形態における特徴」では、有紀年の篆書作品の作品形態を分類整理して、その特徴を検討した。第三章「鄧石如以前とその後の隸書の概観」では、鄧石如以前の隸書の変遷について述べ、鄧石如以後の人物の活躍について概観した(以上、第一章から第三章は、第二十四号の掲

載分)。第四章「鄧石如の隸書への諸家の言及」では、中国と日本の主な識者の言及を取り上げ、鄧石如の隸書をどのように理解してきたかを確認した。また、付記として包世臣の隸書と分書について見解を述べた。第五章「鄧石如の人物交流からみた書法の影響」では、鄧石如自身と後人の言及を取り上げた。第六章「鄧石如の有紀年隸書作品からみた書風の変遷」では、第一章から第六章までの確認と理解をふまえて、鄧石如の有紀年隸書作品からみた書風の変遷を論述した。

本稿の研究の主題は「鄧石如における隸書筆法形成の理解への試論」であったが、第四章「鄧石如の隸書への諸家の言及」における中国・日本の諸家の言及は多面に及ぶ。これを要約すれば以下の四点が挙げられよう。第一点―古典臨書の多様性としての漢碑から魏碑への応用、第二点―筆法としての逆筆藏鋒の確立、第三点―用具用材としての羊毫と生宣紙の使用、第四点―強く影響を与えた人物交流である。

まず、第三点の「用具用材としての羊毫と生宣紙の使用」は確認できる初期作品から用いられており、その使用の開始年代については判然としない。第四点の「強く影響を与えた人物交流」は、第五章の第三節で述べた通り程瑤田と金榜であり、とくに程瑤田からの指教を鄧石如自身が述べるが、隸書の初期作品を確認できる以前の

交流で、その変化を確認することはできない。

次に、第二点の「筆法としての逆筆像法の確立」については、第六章（Ⅲ）で述べた通り五十歳から五十三歳頃と考えられ、畢沅の政務所での交流が、つよく鄧石如に刺激と影響を与えたと推断され、その作品表現は漢碑また魏碑を標榜して多様である一方で、作風は堂々としてそれぞれに面貌を確立している。

最後に、第一点「古典臨書の多様性としての漢碑から魏碑への応用」では、鄧石如において隸書作品の変遷はその篆書作品に比べると変化は大きく、よりダイナミックに展開している。また作品の表現も多様で、一時期に複数の表現様式を見せることを確認できる。このことから、鄧石如における隸書作品のこれといった出自は決め難いものである。確かに包世臣は多数の隸書碑を学んだことを述べているものの、その選択については触れていない。康有爲は『史晨碑』『禮器碑』と断定しながら、他所では「諸碑に学ぶ」といい、筆述は一致していない。こうして検討を進めるとき、結論としては鄧石如においては篆書に対する追求と、隸書に対する追求は相互にまた同様に懸命精進したものであるが、その表現の多様さにおいて隸書に効力が多く発揮されたと言える。

くわえて本稿においては第四章第一節の追考―包世臣における隸書と分書について―において、従前にあまり言及されず未解決のま

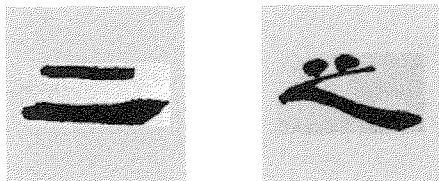
まであったが、新たな見解を提言出来た。さらに第六章（Ⅰ）の追考―『酒泉福祿碑』について―において、鄧石如の隸書作品款文にある「摸『酒泉福祿碑』筆意」の碑名が不詳であったが、これが『曹全碑』であることを指摘できた。以上の見解また指摘については、識者の批正を願いたい。

なお、参考文献については、文中に明記したので重複を避けて再掲しない。

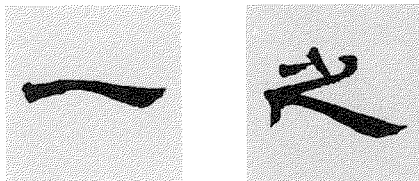
（平成三十年十月三十日稿）

参考7 鄧石如隸書作品における年代順の変遷 (図版縮小率不同)

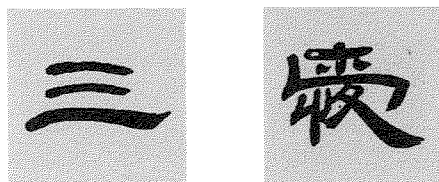
変遷 (I) 分書 図2 (44歳) 部分



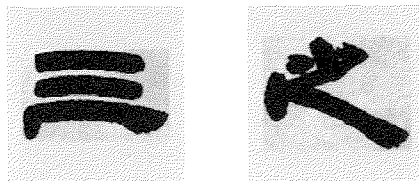
変遷 (III) 分書 図15 (57歳) 部分



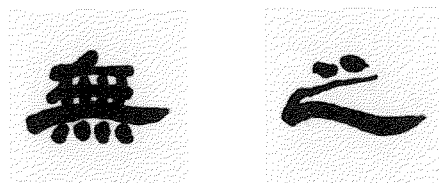
変遷 (I) 分書 図4 (48歳) 部分



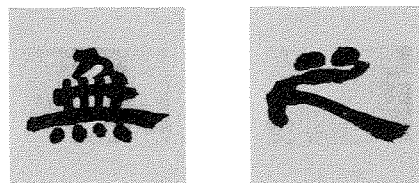
変遷 (IV) 隸書 図23 (60歳) 部分



変遷 (II) 分書 図7 (50歳) 部分



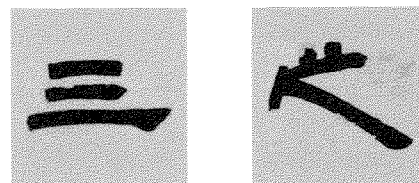
変遷 (IV) 隸書 図25 (60歳) 部分



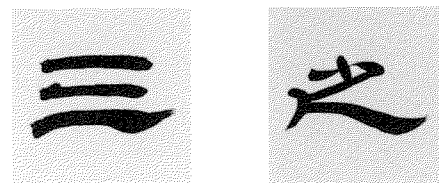
変遷 (II) 隸書 図8 (50歳) 部分



変遷 (IV) 隸書 図32 (63歳) 部分



変遷 (III) 分書 図14 (55歳) 部分



変遷 (IV) 隸書 図35 (63歳) 部分

